

I エジプト史の中でのラムセス2世

1. 古代エジプト史の時代区分

初期王朝時代	古王国時代	第1中間期	中王国時代	第2中間期	新王国時代	第3中間期	...
BC3000～2625	2625～2130	2130～1980	1980～1630	1630～1539	1539～1075	1075～656	
第1～3王朝	4～8王朝	9～11王朝	11～14王朝	15～17王朝	18～20王朝	21～24王朝	

以降、末期王朝時代(第25～30王朝、ペルシャ王朝)を経て、グレコ・ローマン時代(BC323～AD395、マケドニア王朝、プトレマイオス朝、ローマ皇帝支配下)となる。

2. 新王国時代第19王朝とラムセス2世

第19王朝の創始者 ラムセス2世の祖父・ラムセス1世(パ・ラムセス) 第18王朝の宰相・軍司令官だった。

第18王朝の最後の王ホルエムベブ(後継者となる子がいな)の指名による。

パ・ラムセスに対する評価 + 高い素質を持つ息子(セティ1世)と孫(後のラムセス2世)への期待で。

II ラムセス2世に関する遺跡、遺物

1. アブシンベルにある遺跡

① アブシンベル神殿の発見と保存

—ユネスコ世界遺産創設の契機に—

神殿完成 BC1256年頃 その後埋没 1813年、スイス探検家 ルードヴィッヒ・ブルクハルト 小壁の一部を発見。

1817年イタリアの探検家ジョバンニ・バッティスタ・ベルツオーニが出入り口を発掘。

20世紀半ば アスワンハイダム建設 ナセル湖に水没の危機

ユネスコ主導による救済事業 方法は国際コンペ 約50か国からスウェーデン案を採用(他に仏、伊など)。

1963年から5年の歳月 世界中から約3000人の人員を掛け 神殿は1041のブロックに切断。

元の場所より210m北西の60m高い現在の地に移設・保存された。 1972年世界遺産条約採択 1975年発効

② アブシンベル大神殿

ラムセス2世が神格化した自分と太陽神ら3神を祀って建造。 BC1256完成。

神殿正面 ラムセス2世の巨像4体 21m 足元には、王子たちと王妃ネフェルタリ像。

正面入口側壁 2人のハピ神による上下エジプトの統一と国家安定を示す「セマア・タウイ」の儀式。

上エジプトの象徴のロータス(ハス)と、下エジプトの象徴のパピルスをつないでいる。

ハピ神の中央にラムセス2世の即位名を表すカルトーシュ。

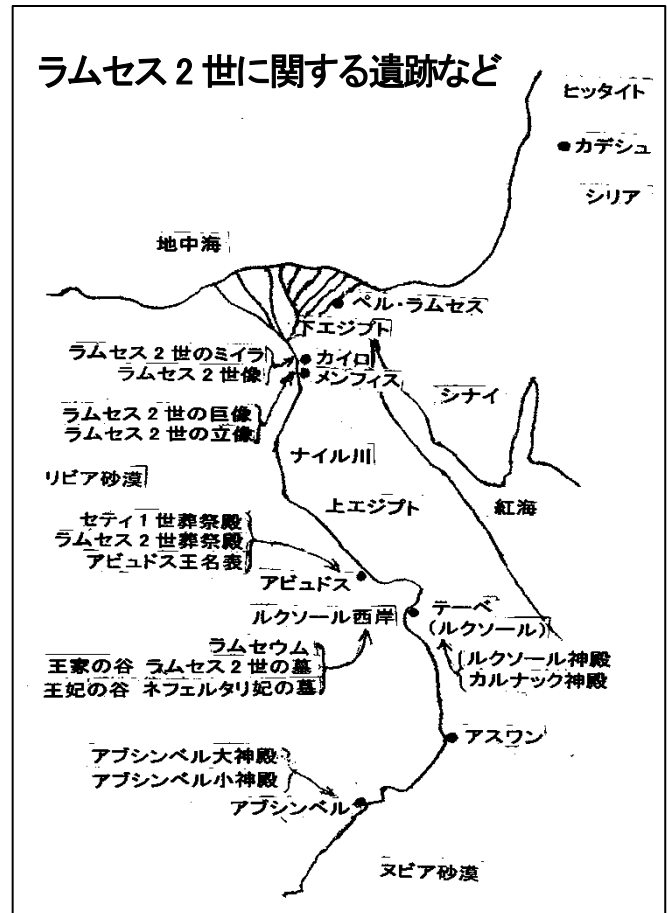
ファラオ名は五重称号 ①ホルス名 ②ネプティ名(二女神名) ③黄金のホルス名 ④即位名 ⑤誕生名

その下にはラムセス2世の名を表すカルトーシュ。

右側が即位名「ウセルマアトラー・セテプエンラー」、意味は「太陽神ラーの真理は力強い、太陽神に選ばれしもの」

左側は誕生名「ラーメセス・メリアメン」、意味は「太陽神ラーの創りしもの、アメン神に愛されしもの」

さらにその下、左側にはヌビアの捕虜がロータスで、右側にはアジア人の捕虜がパピルスで縛られている。



神殿入口を入ると大列柱室 幅16.7m、奥行き18mで、高さ9.14mの柱が8本。
柱の前面にオシリス神の姿をしたラムセス2世 両手を交差させ4体ずつ中央に向かい合い並ぶ。

冥界の王オシリス神の姿をとることは、永遠の生命を得ることとなる。

壁面には、闘うラムセス2世の姿を描いたレリーフが多数。

シリアやヌビアとの闘い、カデシュの戦いなどの戦闘場面 スビアやアジアの捕虜を打ち据える場面など。
さらにその奥に神殿の至聖所 幅4m、奥行き7mで、神殿の入口からは47mの所。

奥の壁面にこの神殿に祀られた4体の神々の座像。

向かって右から 太陽神ラー、神となったラムセス2世、王の守護神アメン・ラー、宇宙の創造神プタハ。

年に2回、2月と10月に朝日が数分間射し込み、像を照らす。現在は2月22日と10月22日に祝う祭り開催。

③ アブシンベル小神殿

ラムセス2世が王妃ネフェルタリのために建造 ネフェルタリと現地の地方神ハトホル女神に捧げられる。

正面 高さ10mのラムセス2世と王妃の立像 ネフェルタリ像1体を挟んでラムセス2世像を2体両側に配置。

足元に2人の間の王子や王女の像 ネフェルタリ妃は重そうなカツラをかぶり、その上に2枚の羽と2つの角が着いた太陽が置かれ、左手には打楽器を持つ。

ネフェルタリとは古代エジプト語で「最も美しい女性」を意味し、ラムセス2世が最も愛した王妃。

「偉大なる王妃」「上下エジプト2国の女王」などの称号で呼ばれていた。

入口を入ると列柱室 幅11m、奥行き10.8m、高さ3.17m。

6本ある柱には牝牛の耳をした女性の顔で表されるハトホル神が施され、中央に向かい合っている。

ハトホル神は音楽、愛、ダンスの女神とされ、多くの性格を持ち、すべての神の母と見なされていた。

列柱室や前室の壁面には、ラムセス2世やネフェルタリ妃に関するレリーフが多数。

左側のハトホル神と右側のイシス神から冠を授かるネフェルタリ妃 3人ともに命の鍵アンクを手に行っている。

ネフェルタリ妃がハトホル神に打楽器シストレム2つを鳴らして捧げている姿も。

このような楽器の捧げ物は女神の怒りを慰める目的があるという。

至聖所の奥壁には、2本の柱で表されるムート女神とハトホル女神に対し、ラムセス2世が捧げ物をする姿もある。

こう見てくると、アブシンベルの岩山を刻んで建造した大小一対の神殿は、ラムセス2世が最愛の王妃ネフェルタリと自分自身との永遠の結びつきを願いつつ、神々に捧げた巨大なモニュメントといえよう。現地を訪れて感じたのは、月並みな表現ではあるが、そのスケールの大きさと、それを実現したラムセス2世の強大な権力である。

2. ルクソールにある遺跡

ルクソールは新王国時代に首都テーベがあった所。歴代の王たちが競って壮麗な建造物を建てた。

ルクソール東岸は「生者の都」といわれ神殿や都市機能が集中。

ルクソール西岸は「死者の都」ネクロポリス・テーベと呼ばれ、王や王妃らの墓所として利用。

①ルクソール神殿

中王国時代にはこの地に神殿があった。その後、ラムセス2世が現存する神殿の大部分を造り上げた。

第1塔門の前 高さ15.5mのラムセス2世の座像2体と立像1体 高さ25mのオベリスク1本。

立像は当初4体、現存は1体。オベリスクも左右2本のうち1本は1836年にパリのコンコルド広場に移設された。

オベリスク表面 ラムセス2世のカルト・シュが繰り返されている オベリスクの脇にはラムセス2世の頭部。

第1塔門前の座像台座 ハピ神2体がロータスとパピルスを結びラムセス2世が上下エジプト王であると示す。

第1塔門を入るとラムセス2世の中庭 正面の第2塔門の前にはラムセス2世の座像を2体配置。

中庭の周囲、東・西・南側の柱の間にはラムセス2世の立像が並ぶ。

②カルナック神殿

カルナック神殿 アメン大神殿を中心に、ムート神殿、メンチェ神殿からなる。アメン大神殿は多くのファラオがその時々で建造に関わるが、多くの部分がラムセス2世により、自分自身を表す幾つかの遺物を残す。

アメン神の聖獣といわれる牡羊の頭を持つスフィンクスが両側に40体並ぶ参道を経て第1塔門に至る。牡羊の頭の下にファラオの姿。第1中庭奥正面の第2塔門の前に、高さ21mのラムセス2世立像が向かい合う。左側の像の足元 ラムセス2世の娘であり妃でもあったベントアナトの像が周り込まれている。第2塔門を抜けると巨大な柱が並ぶ大列柱室 高さ21mから15mの柱134本がところ狭しと林立する様は壮観。この列柱室の完成もラムセス2世で、柱には即位名と誕生名のカルトージュが、至る所に繰り返し彫られている。

④ ルクソール西岸

ルクソール西岸はネクロポリスで、王家の谷、王妃の谷、貴族の墓、ハトシェプスト女王葬祭殿、ラムセウムなど。王家の谷にはラムセス2世の墓があり、祖父のラムセス1世、父のセティ1世、息子のメルエンプタハ王、孫のアメンセス王、同じく孫のセティ2世、曾孫のサタプハ王の墓などが各々独立して点在している。王妃の谷にはラムセス2世の最愛の王妃ネフェルタリの墓がある。

⑤ ラムセウム(ラムセス2世葬祭殿)

ラムセス2世が建造した葬祭殿で、東西260m、南北170mと広大だったが、現在は第1塔門、第2塔門、大列柱室の一部を残すのみ。域内にはラムセス2世の母親トウヤとネフェルタリ妃の小神殿の跡も。第2塔門の前にはラムセス2世の巨像が倒壊して放置されている。高さ18m、重さ約1000tと推定される。レリーフには、ラムセス2世が太陽神ラー・ホルアクティから命の鍵を授かる姿、ラムセス2世が戦車に乗って矢を射る姿など。

⑥ ネフェルタリの墓

地下8mの位置に長さ27mで、通路、前室、側室などの奥に大きな玄室 長期間の修復後に公開された。柱も壁も石膏の上に色鮮やかな絵画、美しいネフェルタリ妃の顔、マアト神の保護を受け命の鍵アネクを持つ王妃。ゲームに興じたり鳥の姿になったり祈りの姿勢をとる姿など。玄室も柱も美しく、天井には冥界の空を飾る無数の星。

3. メンフィス他にある遺跡・遺物

① メンフィス

宇宙・万物の創造神を祀るプタハ神殿の前にラムセス2世の巨大な像が横たわる。大きさは15m。現在、プタハ神殿は基礎部分や敷石が残るのみ その神殿跡にラムセス2世の高さ7mの立像がある。上エジプトの象徴である白冠と呼ばれる冠だけの姿が特徴 上下エジプトの王となる以前の若い頃の姿であろう。

② カイロ

カイロのエジプト考古学博物館で見たラムセス2世のミイラは身長173.3cm、頭髪も残っており、金髪のような白髪のような色だった。一説には彼は赤毛であり、そのため赤い砂漠の神・セト神を大切にしたともいわれる。

なお、1974年、ミイラの皮膚が感染症で破壊の恐れが見つかる。1977年パリの病院に送られ、カビと診断され、治療に成功。なお、当時の国際法に基づきパスポートが作られ職業欄には「王(死者)」と記載された。

ミイラは現在、2021年に開館のエジプト国立文明博物館のミイラ室にて展示。

Ⅲ ラムセス2世とその一族

① 第19王朝および父王セティ1世とラムセス2世との関係

祖父のラムセス1世はわずか1年4ヶ月の在位、その死に際して息子セティを後継者に指名、さらにその後継者として孫のラムセスを指名していた。

セティ1世は即位時に、すでに30歳前後。頑健な身体、勇敢な戦士で、有能な為政者であり、神々との対話にも熱心な王。在位13年間でエジプトの国力は回復。

手掛けた主な建造物は、アビュドスのセティ1世葬祭殿、ラムセス1世に捧げた神殿、後のペル・ラムセスとなる地の王宮、セト神殿、ルクソール東岸のカルナック神殿の中のアメン大神殿の大列柱室、西岸のセティ1世葬祭殿、王家の谷のセティ1世王墓など。その多くは、ラムセス2世が引き継ぎ完成。金山や採石場の開発にも意欲的。

海外進出は、リビア、シリア、レバノンへの進攻、ヒッタイトとの戦いなど。その幾つかにはラムセス2世も同行。

セティ1世はラムセスが幼い頃から、彼を国王代理、王位継承者として王の職務を教え、特権や栄誉を授けてきた。

アビュドスのセティ1世葬祭殿に、後にラムセス2世が奉納した大石碑には「大君は子である私を偉大なものに育て、私を統治者とした。…私を抱いて民衆の前に姿を現すとき、父はこう言っていた。『この子を玉座につけよ。余がこの世にあるうちに、その晴れ姿を見たいから』と父王との共同統治を強調。

② 王妃ネフェルタリとラムセス2世の女たち

ラムセス2世には正当後継者の母となりうる正妃が2人いた。ネフェルタリとイシスネフェルトである。ネフェルタリとの結婚は、彼女が15歳で彼が14歳のとき。ネフェルタリは彼女が彼の治世24年目に没するまで、常に第1王妃の座にあり、ラムセス2世に一番愛され、しかも尊敬されていた。彼女のためのアブシンベル小神殿は、自分の大神殿よりも先に建てたという。彼女はハトホル神の冠をかぶっている。ハトホル神は舞踊・音楽や恋愛の女神であると同時に、昔からファラオを守護する女神とも。彼女をハトホル神になぞらえたのは、ラムセス2世よりも年上かつ賢明で、若き王を支えたということも示唆か。

ネフェルタリは、ラムセス2世の長男アメンヘルケプシェフを初め、3男、11男、16男と、4女、5女の母。彼女のため王妃の谷に一番美しい墓を作る。そこに描かれたネフェルタリは、気品と威厳に満ち、美しい肢体。ネフェルタリの死後、第1王妃の座はイシスネフェルトに。ラムセス2世の2男、4男、13男と、1人の娘を産んだ。4男が王子カエムワセトで、13男がラムセス2世の後継者となったメルエンптаハ。

王家の伝統に従い、ラムセス2世は身内から多くの妃をめとる。自らの3人の娘、すなわちイシスネフェルトとの間のベントアナト、ネフェルタリとの間のメリアメン、さらにネベトタウイ、自分の妹のヘストミイラーである。

さらにはカデシュの戦いの後、平和条約を結んだヒッタイトの王ハットウシリ3世の長女をめとり、マアトネフェルウラーというエジプト名を与えた。さらにその何年か後に、もう1人のヒッタイトの王女をめとっている。この他にも、6人の側室、後宮には数百人の女性がいたとされる。中にはシリアやバビロニアの王家の女性も含まれていたという。

③ ラムセス2世の王子たち

ラムセス2世は子沢山でもあった。アブシンベル大神殿には8人の王子と9人の王女の肖像がある。ルクソール神殿には18人の王子の行列があり、ラムセス2世葬祭殿には23人の息子の記録、セティ1世葬祭殿には33人の息子の名前が記録されている。王子・王女の数は200人近くから100人以下まで、諸説あり。

王子のうちラムセス2世が一番可愛がったのは、イシスネフェルトとの間のカエムワセト。彼は第4王子だが当初は後継者に決まっていた。後に「考古学者王子」とか「魔術師」と呼ばれた。メンフィスでптаハ神の神官をつとめ、古文書を読んだり、壊れて解読不能になった建造物の碑文を復元。父王の王位更新祭の運営なども行なったが、ラムセス2世よりも先に亡くなってしまふ。

結局、ラムセス2世を継いで即位したのは、第13王子のメルエンптаハだが、既に60歳近かった。

IV ラムセス2世の治世と業績

1. 政治体制とその治世下のエジプト社会

① ファラオの政治を支えた高官、役人たち

ラムセス2世は幼い頃より、父王セティ1世から帝王学の薫陶を受ける。紀元前1279年単独統治を始めると、父王の政治、政策を引き継ぎ、さらに発展させた。シリアを始めとし海外遠征も積極的に行ない、領土の拡大と保全に努めた。内政でも神殿の建設、農耕牧畜、金山開発、採鉱採石などに力を注ぐ。

ラムセス2世は枢要な役職には、親類縁者や長年の友人を割り当て、これらの政策を支えさせた。ラムセス2世の即位と同時にアメン大神官に任命された者、宰相で先代のアメン大神官の息子、他のアメン大神官、副王、国王名代海外使節、アブシンベル神殿の建設工事監督等々。血縁・縁戚で王家と相互に関係を結ぶ。主要な国家神の神殿は、祭祀の中心のみならず、経済的な流通の中継点としても必要不可欠。そして、それらの大神官は国家の最重要人物。

当時、宰相は2人いて、1人はテーベで南部の行政を、もう1人はペル・ラムセスで北部の行政を担当。

宰相は行政の長であり時にはファラオの相談役。仕事は、国庫長との協議、官僚や使節との連絡、田園の管理、採鉱採石隊の組織、大規模な土木事業の実施、行政訴訟や民事の裁判、王宮の警護など多岐にわたる。

地方や属領には地方長官職や総督職を置く。ヌビアの行政担当の「副王」は宰相に匹敵。下に、要塞司令官、金財務官、王領管理官、王領監査官、傭兵隊長などがいて現地を治めた。

兵を募る場合、徴兵のほか、職業軍人、捕虜、外国人の傭兵なども。

② 文化・芸術、生活を豊かにした職人や専門家たち

文化、芸術の発展や生活の向上を支えたのは、多数の職人、法律家、建築家、医師、書記など専門家たち。ルクソール西岸の王家の谷と王妃の谷の間にデイル・エル・メディーナの集落遺跡。第18王朝初期から第20王朝末期までの約500年間、国王直属の職人、優れた腕を持つ石工、左官、絵師、彫師たちが何世代も住み、王家の墓造り等に携わっていた

彼らは宰相の監督下、班長の指示で働く。家族とともに暮らし、召使いを雇う者も。水汲み人などの下働きは政府から。給与は穀物、油、魚、野菜などの現物支給。他に仕事の道具や資材、布地や衣服、サンダル、薪なども支給されていた。女たちは穀物からパンやビールを作った。ラムセス2世の時代には、肉やワインがふるまわれる時も。村には大幅な自治が認められ、書記が日誌や帳簿をつけ、家族や村の安全は警備員や警官によって守られた。このように豊かでゆとりある生活が、彼らの素晴らしい仕事の源泉。

ラムセウムには、今日の大学にあたる「生命の家」。多くの学生が寝泊りし、神学や神話、王の讃歌などの研究。医師、魔術師、書記、天文学者、地質学者、測量技師、建築家、絵師たちは「生命の家」で厳しい職業訓練を受けた。当時、医術と魔術は密接な関係で、エジプトの医師と魔術師は評価が高く、あちこちの宮廷からも招聘された。ラムセウムには図書室もあったし、デイル・エル・メディーナの遺跡からは、文学作品の写しが大量に出土。（

2. カデシュの戦いとその後

ラムセス2世にとって、治世5年目のヒッタイトとの「カデシュの戦い」は、特筆すべき業績だと考えていたようだ。その証拠に、戦いで武勇伝が、アブシンベル大神殿を始め、カルナック神殿、ルクソール神殿、ルクソール西岸のラムセウム、アビュドスのラムセス2世葬祭殿などのレリーフに残されている。

① 戦いの経過

シリアの都市カデシュは戦略上の要地で、エジプトもヒッタイトも周辺国もその支配下に置こうとしてきた。ラムセス2世は治世5年目の紀元前1275年に、ヒッタイトの属領でカデシュのあるアムル州を、降伏・臣属させるため軍を動かした。エジプト人、ヌビア人、アジア人からなるエジプト軍は総勢約2万人。神々の名をとったアメン師団、ラー師団、プタハ師団、セト師団の各5000人の4師団から成る。

約1ヶ月をかけてエジプト軍はカデシュの南の山地まで到着。ヒッタイトのムワタリ王は、約3万7000人の軍と3500台の戦車で待ち構えていた。エジプト軍は、大軍に加え、食糧や日用品を積んだ車を引き連れての行軍で、隊列は伸びきっていた。そして、ヒッタイト側の奸計に陥って油断しているところを攻撃される。エジプト軍は大混乱に陥り、ラムセス2世も孤立するありさまだったという。

だが、神殿に残るレリーフには、ここからのラムセス2世の武勇伝が、ここぞとばかりに伝えられている。王は愛馬の引く戦車に乗り込むと、敵戦車軍団の只中へと斬りこんでいったのである。ラムセス2世の追撃は6度にも及んだ。精鋭ナルナ部隊やプタハ師団も合流し、エジプト軍は勝利を確信。翌日もまたエジプト軍が圧勝し、敵兵の死体が山積みされ、ついにヒッタイト側から和睦の申し入れがあった。

ラムセス2世はそれを受け入れて軍を引き、エジプトに戻ったとされている。

しかし2日目の戦いについては不詳で、ヒッタイトからの和議申し入れというのも定かではない。むしろヒッタイトの方が優位で、アムル州からエジプトが手を引くよう条約が提示され、ラムセス2世はそれを無視して撤退したと考えられる。ムワタリは直ちにアムル州を再び支配下に置いた。

実はこの戦いはエジプト軍にとっては敗戦同様のもので、記録はそれを糊塗するためとも推論される。ヒッタイト側の記録では、和睦の申し入れはエジプト側からで、ヒッタイトの全面的勝利だったとしているのだ。

②世界最初の平和条約と贈られた花嫁

それ以降、エジプトとヒッタイトとは緊張関係が続いていたが、ラムセス2世の治世21年目の紀元前1259年、ムワタリの後のヒッタイト王ハットウシリ3世からの提案で、世界最初の平和条約が結ばれた。概要は、

「第1に、現状での領土を互いに尊重し、侵害しないこと。第2に、一方の国が他国から侵害されたとき、または内乱が起きたとき、他方は求めに応じて援軍を送ること。補則として、一方の国から他方の国へ政治亡命者が出た場合、速やかに元の国に引き渡すが、帰国後に罰を加えてはならない」となっている。

その後、両国の友好関係は続き、紀元前1256年にハットウシリ3世の長女が莫大な持参品とともにラムセス2世に嫁入り、紀元前1246年には王妃となった。彼女のエジプト名はマアトネフェルウラーという。さらに7年後には、ハットウシリ3世のもう1人の王女がラムセス2世の妃となる。察するに、カデシュから命からがら帰国した時とは比べものにならないほど、ラムセス2世の力は強大なものとなっていたに違いない。

3. アビュドス王名表

アビュドスはナイル中流域の地名。アビュドス王名表と呼ばれるものは、2つある。1つは、セティ1世葬祭殿の回廊のレリーフに刻まれているもので、もう1つは、同じアビュドスのラムセス2世葬祭殿から出上した王名表の破片で、現在はロンドンの大英博物館に保管されている。

全体像が分かるのはセティ1世葬祭殿のもの。メニ王からセティ1世までの76人の王名がカルトーシュで2段に列記されている。その歴代の王名に向かいセティ1世と王子のラムセス2世が呼びかけをしており、さらに3段目にはセティ1世の即位名と誕生名のカルトーシュが繰り返されており、上に書かれた偉大な祖先の系譜にあることを示して、自身の王位の正当性を強調するものとなっている。

見方を変えれば、ここに記されている王が、セティ1世、ラムセス2世からは正当な王と見なされていたのである。何人かの王が省かれており、第9、第10、第13～17王朝の王、第18王朝のハトシェプスト女王、アメン神信仰を否定してアマルナ宗教改革を行い、国内を混乱させたアメンヘテブ4世(アクエンアテン)、スメンカーラー、ツタンカーメン、アイたちの名は無い。ラムセス2世葬祭殿の王名表は、セティ1世葬祭殿のものと同じものの最後にラムセス2世の名を付け加えたものである。

4. 神々と王の使命とラムセス2世

ファラオを頂点とするエジプトの政治体制は、「王は神なり」という考え方を基盤に成り立っていた。王は人間を超越した存在であり、神々が着手した仕事をこの世で続けるため、神々の意向で選ばれた神の子だということである。だから王は神々の加護を仰いで民衆の命と暮らしを保証し、かわりに民衆は王の命令に従い、彼を敬い、仕事に励むのだ。そのためには王は日頃から常に神々を敬い、神々を満足させておかなければならない。

古代エジプトは多神教で、ラムセス2世の時代に最も重要視されたのは、アメン、ラー、プタハの3国家神。

アメンはテーベの創造神で、後にラーと習合してアメン・ラー神として国家の最高神となる。

ラーは太陽神で王はこの神の子と考えられ、王の守護神である。

プタハはメンフィスの主神で、創造神で職人の神でもある。

この3神は国家の祭祀の中心に置かれ、土地とそれに付随する農地・農民、牧草地・家畜などの恵みを享受できる。ラムセス2世が各地に神殿や葬祭殿を建設し、神々を祀り、神々に捧げものをし、また神々から授かりものをする自分たちの姿を描いたレリーフを、いたる所に残したのも納得がいく。

さらに王は、セケム(力)によってイセフェト(災い)を退け、ヘカ(政治)によってマアト(幸い)を国にもたらす務めを負わされている。イセフェトとは敵、貧困、不正、混乱などの概念で、マアトはそれに対立する概念で、勝利、繁栄、公正、秩序など。これも神々の加護のもとに達成できるのである。ラムセス2世らが神々の前で、アビュドス王名表で、自分たちの王統の正統性を記し、歴代の王たちに誓ったのも無理がない。

エジプトの国と王権を脅かすものに対する戦いと、民衆を守り豊かな生活をもたらすことは、ファラオの最たる義務であり、神々から許された権利であった。

V ラムセス2世についての歴史的考察

以上を踏まえ、ラムセス2世について、私なりの歴史的考察を述べることにする。

前述のとおり、王の使命は、神々の加護を仰いで国を守り、民衆の命と暮らしを保証すること。そのために、王は自らの正統性を明らかにしたうえで、常に神々を敬っていることを示し、神々を満足させておかなければならない。

①正統性の主張

王としての正統性について、ラムセス2世は種々な形でそれを主張している。

アブシンベル大神殿のラムセス2世座像の台座の側壁には、ナイル川の氾濫を神格化した2体のハピ神が向かい合い、上エジプトの象徴であるロータスの花と下エジプトの象徴であるパピルスとを結んでいるレリーフがある。これは、上下エジプトを統一し国家の安定を表す儀式で、ハピ神の間にはラムセス2世自身の即位名を表すカルトーシュが描かれている。ラムセス2世が、正式な手続きを経て即位した上下エジプトの王であることを示すものに他ならず、同様のレリーフは、見てきたようにルクソール神殿の複数のラムセス2世座像の台座の側壁にもある。

また、神殿などの彫像やレリーフに描かれたラムセス2世は、下エジプトの象徴である赤冠の上に、上エジプトの象徴である白冠を載せた二重冠を冠っており、これも上下エジプトの王であることを明示するものである。

さらに、ラムセス2世の王名を表すカルトーシュは、即位名が「ウセルマアトラ・セテプエンラー」で、意味は「太陽神ラーの真理は力強い、太陽神に選ばれしもの」、誕生名は「ラーメセス・メリアメン」で、意味は「太陽神ラーの創りしもの、アメン神に愛されしもの」であつて、自分が神の子であり、いかに神々に愛されて王権を担っているかを示している。このカルトーシュは、アブシンベルの大・小神殿はもちろん、ルクソール神殿、カルナック神殿、オベリスクなどのいたる所に描かれている。特にカルナック神殿の大列柱室にある134本の柱の殆どに、繰り返し彫られていて、思いの強さが感じられた。また、先にみたアビュドス王名表も、初代メニ王から父王セティ1世まで76人の歴代の王名に向かい、父王とともにラムセス2世が呼びかけをしており、偉大な祖先の系譜につらなることを示し、自身の王位の正統性を強調している。

②神々への敬慕の発露

神々への敬慕の念を表し栄光を讃えるため、ラムセス2世は次々と大建造物を建立。アブシンベル大神殿は太陽神ラー・ホルアクティ、王の守護神アメン・ラー、宇宙の創造神プタハと神格化した自分を祀り、アブシンベル小神殿はハトホル神と愛妃ネフェルタリに捧げられた。ルクソールのカルナック神殿もルクソール神殿も大部分がラムセス2世により完成された。ルクソール西岸のラムセウム、アビュドスのセティ1世葬祭殿、ラムセス2世葬祭殿なども同様だ。これらは神殿そのものが捧げものであると同時に、そこに彫られたレリーフや壁画には、神々に捧げものをし、また神々から授かりものをする自分たちの姿がいたる所に描かれ、いかに深く神々を敬っているかを表す。

また祭祀も重視した。王の再生儀式である王位更新祭(セド祭)は即位30年目の第1回を初めとし以降3年ごとに14回行なわれた。各神殿には大神官や神官を置き、毎日の祭儀はもとより、暦に従って各地で行なわれる数々の祭り、さらには国家的祭事まで、常に民の安寧と国の繁栄を祈願していたのである。

② 王の使命の実践

こうして王としての正統性を明らかにし神々の加護を祈った上での王のなすべきことは、セケム(力)によってイセフト(災い)を退け、ヘカ(政治)によってマアト(幸い)を国にもたらすことである。これにもラムセス2世は力を注いだ。例えば、カデシュの戦いは、ヒッタイトというイセフトに対するセケムの行使である。それに勝利して講和条約を結ぶというヘカにより、ヒッタイトの王女を自分の王妃として迎え、両国に平和と繁栄というマアトをもたらした。

内政では、財政の安定、農耕牧畜、金山開発、裁判の公平などと共に、文化・芸術の発展にも力を入れた。デイル・エル・メディーナの職人村には優秀な石工や絵師などがおり、ラムセウムの「生命の家」は今日の大学にあたり、医師、天文学者、建築家など多数の専門家が養成されていた。こうしてラムセス2世は、有能な神官、官僚、軍人、専門家らに支えられ、ナイルの恵みと神々の加護のもと、エジプトを67年にわたり統治。その長期安定統治のもとでは、正義と道徳が尊ばれ、民の生活は豊かになり国は栄えに栄えた。

ラムセス2世は自己顕示欲の強い建設狂だという見方もあるが、民のためにひたすら神々の加護を願い、神々を敬い喜ばせようとした結果が、多大な神殿の建設になったと考えれば、王としての務めを極めて忠実に果たしていたことになる。そして、さらに適切にセケムとヘカを用いマアトをもたらして、国と民を当時未曾有の繁栄に導いたのであるから、彼こそ王の使命と責務を正確に自覚し、その実践に邁進した王といえるのではないか。

エジプトを含む当時のオリエント世界での大国は、ヒッタイト、アッシリア、バビロニア等であるが、ラムセス2世は、対外政策も巧みに国土・領土を強固なものとし、その長期統治下、平和と繁栄を国にもたらしていたのである。現代の世界の状況と大国の政治指導者らのことを考えても、ラムセス2世は古代エジプトで傑出したファラオであったのみならず、古今東西でも有能かつ偉大な為政者の1人であったと評価したい。

終わりに—現代まで恩恵をもたらすラムセス2世

現在エジプトでは、①地下資源。天然資源の輸出、②スエズ運河通行料に次いで、第3の外貨獲得の財源となっているのが③観光産業だという。4500年前のピラミッドや、3300年前の巨大神殿などファラオの時代の遺産の恩恵に浴しているわけだ。そのエジプトの現存する遺跡の半分以上に、ラムセス2世の名前が刻まれているという。ラムセス2世は、その治世下のみならず、死して数千年後もなお人々に恩恵をもたらしているのである。 (了)

《参考文献》

- ピーター・クレイトン 『古代エジプト ファラオ歴代誌』 創元社 1999
フィリップ・ファンデンベルク 『ラムセスⅡ世—神になった帝王—』 アリアドネ企画 1997
ブリジッド・マクダーモット 『古代エジプト文化とヒエログリフ』 産調出版 2003
ベルナデット・ムニュー 『ラムセス2世—神になった太陽王の物語—』 創元社 1999
松本弥 『古代エジプトのファラオ』 弥呂久 1998
吉成薫 『ファラオのエジプト』 廣済堂出版 1998
吉村作治 『エジプトミイラ5000年の謎』 講談社 2000
Alessandro Bongioanni 『Luxor』 The American University in Cairo Press 2004
Marco Zecci 『Abu Sinbel』 The American University in Cairo Press 2004
Kurt & Edouard Lambelet 『EGYPTIAN MUSEUM CAIRO』 Lehnert & Landrock 1995 ほか